前角老師の偉業

海外留学僧派遣育英会常任理事
龍光寺住職　佐藤俊明

在家人も九旬安居

日本では見ることもできない、珍しく、素晴らしい首座法戦式に参列することができた。

首座は、日本人を父とし、ポルトガル人を母とするウェンディ恵玉中尾という中年女性で、参列者の国籍は十四にも及ぶ、正に国際色豊かな法戦式だった。

法戦式の模様については後述するとして、まずこの法戦式に参列し得た機縁と、法戦式の背景について述べよう。

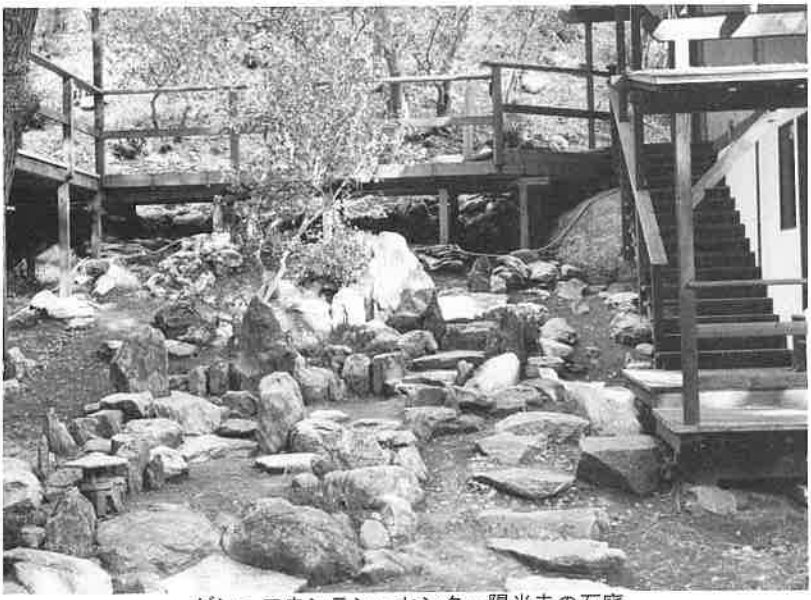
横浜・善光寺の海外留学僧派遣育英会では、アメリカをはじめとする八ヵ国に、すでに十七人を派遣している。理事長である善光寺の黒田武志方丈は、機に応じて受け入れ先を訪ねているが、常任理事の私も時には、ということで、このたびの渡米と相成った次第である。実は涼しくなってからと思っていたのだが、過般来日されたロサンゼルス・ゼン・センター（ZCLA）仏真寺主管の前角博雄老師から「せっかく

来られるなら、安居中に来てほしい。八月二十八日安居終了の日、首座法戦式があるから、ぜひ見てほしい」といわれ、それでは、ということで八月二十六日成田を飛び立つことになった。

私が前回ＺＣＬＡ（仏真寺）を訪ねてから十年になる。その後のＺＣＬＡのあゆみについては、善光寺留学僧の島崎義孝君が中外日報（八月八日号）に詳述しているので、つとめて重複をさけて、見たまま聞いたままを述べてみよう。

洞谷山にそっくりの陽光寺

前角老師は今から九年前、大都市の喧騒をさけて、ロサンゼルスから百二十マイル南に広大な山地を入手し、ＺＣＬＡ直属の組織として「ゼン・マウンテン・センター」をつくり、神戸・八王寺の先住、志保見道雲老師（昭和五十九年没）を開山に勧請し、道雲山陽光寺と命名し、



ゼン・マウンテン・センター陽光寺の石庭

仏真寺の末寺とした。

ロサンゼルスからクルマで二時間有余、境内にさしかかり老樹うっそうとした山路を進むにつれ、私はふと洞谷山永光寺の風光を想起した。そして、樹間に雑然と駐車された三、四十台のクルマや数張りのテントを見ては「われ棲める那坂の山も　踏みならし　苔の下きて　人ぞ訪ひ来る」と瑩山禅師の歌を口ずさんだりして、〝ああそうか、道雲山陽光寺か。なるほど！〟と、私だけの感懐でないことに気付いたりした。それほど永光寺によく似た感じで、私は前角老師に、「洞谷山の十境になぞらえて、道雲山十境を選定しては」と進言したりした。

建物は禅堂と本堂・台所、方丈の三棟しかないが、ここでは毎年夏の結制修行がおこなわれている。(冬安居はロサンゼルス仏真寺でおこなわれる)　結制といえば今日の日本においては、僧堂以外では晋山と抱き合わせの上堂と法戦式がおこなわれる程度だが、ここでは九十日の安居がおこなわれている。

安居はいかにもアメリカ社会らしく、僧俗・男女一体の協同生活としておこなわれ、彼らはこれを「サンガ」と称している。それにしても参加費は三ヵ月の場合千二百ドルというから、十六万円程度。準会員になると千五百ドルで約二十万円。これだけの金を支弁し、仕事を休んで安居することは、日本の社会では到底考えられないことである。

「会社、クビになりませんか」とたずねたら、にっこり笑って「大丈夫」と言っていた。

そう言い切れるほど職場でも安定した地位を得ているであろう中年層が多く、経済的にもゆとりのある様子がうかがわれた。こころなしか、心理学とコンピューター関係者が多いように思えた。

コンピューター会社の社長に、「コンピュータ

ー関係者が多いのはどうしてですか」とたずねたところ、「わかりませんねえ」という。「コンピューターに聞いてもわかりませんか」「わかりませんねえ」と笑ったりした。

今年の安居者は六十数人に及び、建物に入り切れず、テントの中で夜を過ごす者もいた。国籍はアメリカ、メキシコ、ポーランド、フランス、イギリス、カナダ、アイルランド、スコットランド、オランダ、オーストラリア、ノルウエー、アルゼンチン、ブラジル、日本という多彩のもので、ルーリー慈蓮（じれん）バロガン女史などは、メキシコから六年間、欠かさず安居を続けているという。メンバーは一般に知的水準が高く、翻訳された仏教書、禅籍はよく読んでおり、相当高度の話も理解される風だった。

日本人の中には善光寺留学僧の岩波弘道君（第三次派遣）がいた。いっしょに派遣された島崎義孝君は目下、前角老師の高弟デニス・メ

ルツェル玄法師とともにポーランドに行っているので、岩波君は留学僧として二人分頑張っていた。僧俗一体の「サンガ」には日本僧の果たす役割は大きい。

粥罷作務のあとの一炷（いっちゅう）の坐禅に引き続き、十一時三十分から一時間半が提唱の時間である。八月二十七日、この時間帯が私のためにあてられたので、私は「仏真寺に拝登（はいとう）して総持寺開創の偉業を思う」と題して、次のような話をした。彼等が「サンガ」発展の基礎を初期曹洞宗の黎明期に求め、すでに永平寺三代相論についても討議していたことを、島崎レポートで読んでいたからである。

二つの月

皆様方が拙著『二つの月』の英訳本をお読みになっておられることはかねて聞いておりましたが、このたび皆様方のお国に参上し、日頃皆

提唱中の筆者

様方を指導しておられる前角老師に通訳を煩わして、皆様方にお話しできる機会を与えられましたことは、私の無上のよろこびとするところであります。

両箇の月はご承知のように瑩山禅師が峨山和尚を真の後継者として育成すべく、峨山和尚の心底を穿って与えた慈悲心溢れる公案であります。

峨山和尚は十六歳のとき比叡山に登って出家し、八年間、仏教学、とくに天台の教学を修め、その蘊奥を究めました。しかし、真の宗教的安心は学問仏教では得られないことを悟り、比叡山を下って瑩山禅師の会下に投じて禅の修行にはげみました。彼は資性英敏にして筋骨逞しい偉丈夫で、見るからにたのもしく、瑩山禅師はよき後継者に恵まれたことをよろこんだのであります。しかし半面、峨山和尚の、頭のよさを自負している姿、人をしのぐ高ぶりの態度には、心ひそかに案ずるところがあり、〝いつか機会を見て〟と、時節の到来を待ったのであります。

冬の或る夜、月は中天に明るくさえわたり、山も河も、野も里も、清らかな月光に照らされ、えもいわれぬ美しい光景を描き出しており、身も心もそぞろに光に映徹するかのようでありました。

瑩山禅師は、ふと思いついたかのように「峨山和尚、月に両箇あることを知っているか？」とたずねました。

「……」

合点がいかず、返答をためらっている峨山和尚を見て瑩山禅師は、低いがおごそかな口調で言いました。

「月に両箇のあることを知らずんば、洞上の種草となしがたし」

日ごろにないきびしい瑩山禅師の言葉に、峨山和尚はかつて経験したこともない強いショッ

クを受けたのであります。この瞬間から峨山和尚の態度は一変しました。慎み深く大衆に一如した綿密な行持、きびしい坐禅修行。増上慢はみじんも感じられなくなりました。しかし、半年経っても一年経っても「両箇の月」の疑雲はさらに晴れそうもありませんでした。

こうして三年の月日が流れ、彼が二十六歳の年の十二月二十三日、北国の空には寒月がすさまじいまでに冷たく、こうこうとさえわたっておりました。その月の光を浴びて静かに坐禅にはげんでいる峨山和尚の姿を見て、その心境の一段と深まったことをはっきり読み取った瑩山禅師は、峨山和尚の耳もとで指をはじきました。それはまことにささやかな音ではありましたが、峨山和尚には三年の間なやみ続けた大疑団を打ち砕く大音響にひびいたのであります。

「ああ、そうだ。このことだ！」

峨山和尚には、月に両箇ありといわれた瑩山禅師の心が、はっきり会得されたのであります。

両箇の月。一つはいうまでもなく中天にかかって澄み抜いている月であり、いま一つは、その月の光を受けて輝く地上の万物の光のことであります。それは、どれほど仏教教理に精通していても、それが日常生活に肉体化され実践化されて、喫茶喫飯から排便放尿にいたるまで、生活万般にわたってそのまま顕現してくるのでなかったら真のさとりとはいえず、したがって「洞上の種草となしがたし」という、峨山和尚の心底を穿った瑩山禅師の鋭くきびしい指導だったのであります。

峨山和尚は、この一つにして二つ、二つにして一つの関連するところを、今こそはっきりとわがものとすることができたのであります。瑩山禅師の教えの真髄にふれることのできた峨山和尚の歓びと感激は、たとえようのない大きなものだったにちがいありません。

ここから、瑩峨両尊の二つの月の光の輝きが国中を照らすにいたる、一心同体のめざましい教化活動がはじまるのであります。

宗旨と宗門

大本山総持寺は瑩山禅師の開創になるものですが、瑩山禅師が総持寺に住持したのはわずか三年に過ぎません。これに対して峨山禅師は住山四十余年、弄精魂の心血を注がれたのであります。したがって、総持寺発展の実質的な基礎づくりは二祖峨山禅師によってなされたのであります。ゆえに総持寺では、開祖瑩山禅師と二祖峨山禅師を古来より御両尊と尊称し、均等無差に供養給侍して今日に及んでいるのであります。

これはひとり総持寺だけにみる特異なものではなく、実は宗門の寺院においては、第二祖が実質上の開祖である場合が少なくないのであり

觀世音南無佛與佛有因與佛有緣
佛法僧緣常樂我淨朝念觀音
暮念念觀世音念念從心起念念不離心

ます。現に仏真寺においてもそのとおりで、この寺は前角老師の開創になるものであります。しかし、前角老師は自らを開山とせず、師匠の楳庵白純（ばいあんはくじゅん）大和尚様を開山に迎えておられるのであります。私と同道して来られ、ここにお見えの前角老師の実弟、黒田武志方丈の場合もそうであります。横浜の善光寺はこの黒田老師の開創になる寺ですが、やはりお師匠様を開山に勧請して自らは第二世となっておられます。ここに伝法、伝光を重んじ、師匠に蔵身（ぞうしん）する宗門の美風があるのであります。このことは曹洞宗自体の歴史をみる場合にも重要な視点であります。

曹洞宗以外の宗派においては、教祖と宗祖が同一人格でありますが、ひとり曹洞宗のみはこれと違い、高祖と太祖の両祖を仰ぎ、高祖の開いた永平寺と太祖が開いた総持寺は同列同格の大本山という特異の形態をとっております。これはどういうことかというと、栗山泰音禅師著『総持寺史』に次のように述べてあります。

およそ一宗の成立するには、宗旨の開顕と宗門の開発との二原由がある……。

わが日本の曹洞宗は、永平大師が興聖永平の両寺に依ってその宗旨を開顕せられたが、いまだ宗門の開発はなかった……。

瑩山大師が総持寺に依ってはじめてその宗門を開発せられて、ここに一つの宗体がそなわったのである……。

では、なぜそうなったのか。ここでいささか仏教史をさかのぼって考えてみたいと思います。

仏教には五千七百の経巻があるといわれるように、実に多くの経論があり、その説くところは種々さまざまで、互いに異なっております。これらの経論が漢訳され、雑然としてインドから中国に渡来しました。そのため中国の仏教徒

は、はじめ困惑し、帰趨に迷いましたが、やがて、数多くの経論の中から、いずれか一つの経または論を依り処として仏教を理解し、その他の経論をばそれに従属せしめて体系化し、位置付け、仏陀の真の意図を明らかにしようとする努力がなされました。その結果、自らの教学の依り処となった経典や教儀内容の優位を主張する傾向が強くなり、それが宗派成立の要件となりました。すなわち、華厳宗は『華厳経』を、天台宗は『法華経』を、浄土門は三部経を、それぞれ至上最高のものとし、これを柄杓として仏陀の教えの泉を汲み、時処位に応じてその宗教的生命を活かそうとしたのであります。

このように、各宗派は、それぞれ信奉する経典を中心とし、それを依り処として成立したのですが、ここに一つの批判が生まれてきました。

数多い経典の中から特定の経典を依り処とすることは、仏教全体を正しく理解するゆえんではない。ましてや文字は月を指す指にすぎない。指は月のありかを指し示すことはできても、月そのものではない。経典は仏心の周辺を示すことはできても仏心そのものを示すことはできない。そこで、よろしく経典の生まれいずる根源にさかのぼらなくてはならぬ、と主張する宗派があらわれてきました。

経典の生まれいずる根源とは何かというと、釈尊がお経を説かれるときは必ず禅定に入られた。だから端的に坐禅を修して三昧に入り、仏心になり切らねばならぬ、というのが坐禅宗、すなわち禅宗の側の主張であります。

『正法眼蔵』の「弁道話」に、

仏法におほくの門あり、なにをもてかひとへに坐禅をすすむるや。しめしていはく、これ仏法の正門なるをもてなり。とふていはく、なんぞひとり正門とする。しめしていはく、大師釈尊、まさしく得道の妙術を正伝し、また三世の

如来、ともに坐禅により得道せり。このゆえに正門なることを、あひつたへるなり。しかのみにあらず、西天東地の諸祖、みな坐禅により得道せるなり。ゆえにいま正門を人天に示す。

とあるように、仏法の正門は成正覚の姿である坐禅よりほかにないのであります。

さて、禅宗以外の諸宗派をひっくるめて教宗といい、また教宗は経典によって成立しているので仏語宗ともいいます。これに対して禅宗は文字言語を離れ、心によるがゆえに仏心宗ともいわれ、教外別伝・不立文字の立場から文字や言語に捉われることを極度に嫌うのであります。

しかし、それが嵩じて釈尊の説かれた経典まで軽視するとなると、やはりゆき過ぎのそしりを免れません。そこで道元禅師は、禅より出でて禅を排して正伝の仏法を鼓吹されたのであります。というのは、教宗を批判する禅宗は、な

お教宗に対するものとして教宗と同列の相対的立場を出でないものであり、道元禅師はその両者をアウフヘーベンした全一の仏法を説かれたのであります。

すなわち道元禅師によれば、禅宗と自称するものは「仏道をやぶる魔なり、仏祖のまねかざる怨家なり」「宗の称を立せん、如来の弟子にあらず、祖師の児孫にあらず、重逆よりもおもし」（『正法眼蔵』「仏道」）なのであります。その真意は、正伝の仏法とは、釈尊の菩提樹下における成正覚を頂点として、それに至る手だてとして説かれた経典は、いずれも仏法そのものであります。こうして全一の仏法を道元禅師の立場からすれば、一宗一派を分立することは許しがたいことなのであります。ではなぜ曹洞宗という宗名が用いられるようになったのでありましょう。

ここに瑩山禅師登場の歴史的意義があるのであります。

太祖の功業

道元禅師は西暦一二〇〇年に誕生されました。これは宗門の歴史を考える上に基礎となるものですが、私ども児孫にとってまことにキリのよい、覚えやすい便利な数字であります。この、道元禅師の誕生からおくれること六十八年、一二六八年に瑩山禅師が誕生されました。道元禅師と瑩山禅師の誕生に六十余年の開きがあったことは意義深いことであります。

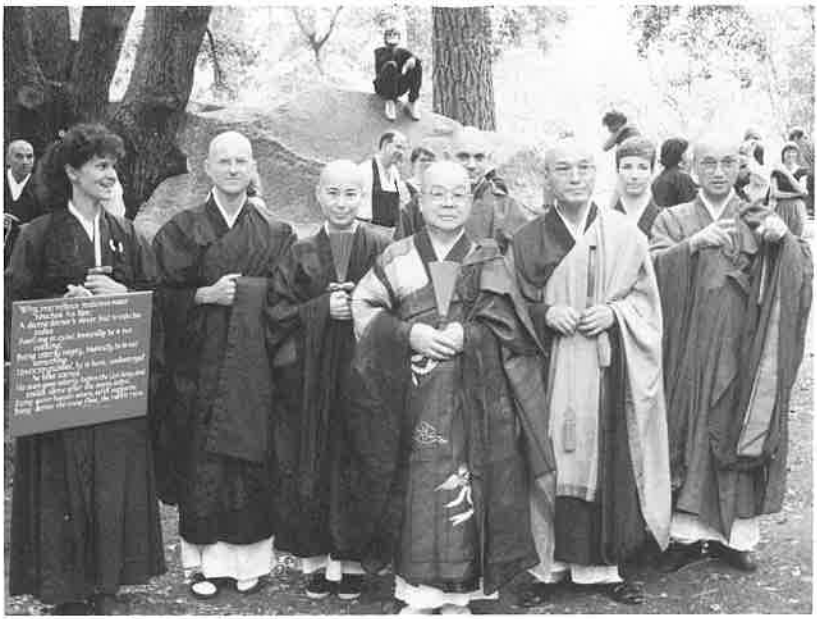
と申しますのは、いま二十一世紀に向かっていろいろ取り沙汰されておりますが、一つの思想なり動きなりが生成発展して次の新しい段階を迎えるのにおおむね百年かかる。そこで百年を一世紀として一つの節目としているわけですが、東洋では六十年経つと本卦返り、還暦といいます。これは六十年が一世紀ということであ

ります。日本は島国でものの動きのテンポが早く、六十年を一世紀とみるとよく割り切れる場合が少なくありません。

たとえば、道元禅師が大仏寺を開かれたのは一二四四年で、五十年後の一二九三年には義价禅師が大乗寺を開き、ちょうど六十年目の一三〇四年に瑩山禅師が大乗寺二世に補せられております。

こうして道元禅師の開創になる永平寺教団が三代相論という世紀末的な結着をみせた折も折、初期曹洞宗胎動の黎明期に瑩山禅師が登場されたのですが、瑩山禅師のすばらしい性格と超人的な活躍が曹洞宗の形成に大きな役割を果たされたことは、宗門にとってなにものにもまさる有り難い法の幸でありました。

道元禅師が出世間的、脱俗的、理智的、学究的で宗旨の確立に理想的であったのに対し、瑩山禅師は世間的であり、情意的であり、実践的



前列左から弁事・書記・首座・筆者・前角老師・黒田方丈

普賢菩薩

で宗門の開発に秀でておられました。つまり道元禅師は創業の徳に欠けるところなく、瑩山禅師は守成、経営の才において備わらざるはなく、道元禅師の宗旨をよく時勢に調和させ、ひろく大衆化されたのであります。すなわち、道元禅師の宗教は、旧仏教と世俗に隔絶した、高く深くきびしい孤高飄逸の純粋禅でありましたが、瑩山禅師のそれは、民衆化、衆生済度を第一義とし、旧仏教を容認し、祈禱や民間信仰をも包む、新しい時代にふさわしい純粋禅でありました。

そんな純粋禅があるかという人がおられるかも知れませんが、それは「月に両箇のあるを知らない」人のたわごとで、純粋禅とは衆生済度の大乗的立場に立った只管打坐の禅であり、これを以て衆生済度を実践化するには、祈禱や民間信仰を包容しなくてはなりません。瑩山禅師は只管打坐の修行生活を自ら行じつつ、その禅風を広く社会にひろめ、浸透させていったのであります。

賜紫出世の道場総持寺

こうした瑩山禅師の衆生済度の実践の在り方は、真言宗という平安時代の旧仏教を改宗のもとにおこなわれた総持寺の開創（一三二一年）ともなり、瑩山禅師の名声は逸早く中央地方にひろまり、後醍醐天皇から「十種の勅問」がくだり、それに対する瑩山禅師の奉答が深く叡慮にかない、一三二二年八月二十八日、綸旨を賜い、総持寺は日本曹洞宗賜紫出世の道場となるのであります。その綸旨の要旨は次のようなものであります。

能登国の諸獄山総持寺は、中国の曹渓山六祖大鑑慧能禅師の正しい法灯をついで、それより洞山良价禅師に伝わる曹洞禅の奥深い道理を宣揚してきた。それ故とくに日本にふたつとない

禅苑であるので「曹洞出世の道場」に補任する（出世＝綸旨を賜い紫衣を着すること）……。

この、綸旨の下賜については、歴史的事実として疑義もあるが、長い宗門史において、総持寺はこの綸旨によって、出世道場としての一宗の本山たることが認められ、同時に総持寺を中核とする宗団が正式に曹洞宗と称する教団となったと伝承されてきたのであります。

以上、竹内道雄師著『総持寺の歴史』によって述べましたが、瑩山禅師が高祖道元禅師と共に太祖瑩山禅師として仰がれるゆえんがおわかりいただけたことと思います。また、総持寺が永平寺と同列同格の本山である意義もご理解いただけたことと思います。

峨山禅師と輪住制度

瑩山禅師の多くの弟子のうち特にすぐれていたのは明峰素哲、峨山韶碩、無涯智洪、壺庵至簡の四人で、これを四哲といい、孤峰覚明、珍山源照の二人を加えて六兄弟といいます。

就中、峨山禅師は総持寺第二祖となり、瑩山禅師の遺志を体して弟子の養成につとめ、総持寺の輪住制度を確立して曹洞宗教団発展の基礎を磐石のものとしました。

峨山禅師には二十五人のすぐれた弟子、二十五哲がおりますが、中でも太源宗真、通幻寂霊、無端祖環、大徹宗令、実峰良秀の五人は峨山の五哲と称され、この五哲は総持寺山内に、それぞれ普蔵院、妙高庵、洞川庵、伝法庵、如意庵の五院を開き、互いに協力して曹洞宗教団の本山としての総持寺の運営、発展に努力したのであります。

峨山禅師は総持住山二十八年目（一三六二）、自筆の置文「総持寺未来住持職ノ事」を示し、その中で、

右彼ノ寺ハ瑩山和尚、韶碩ニ譲与スル処ナリ。

仍テ後代ノ住持職ニ於テハ、韶碩法嗣ノ中ニ於テ、器用ノ仁ヲ選ビテ住持職ヲ補スベシ。末代ニ於テ此ノ旨ヲ守リ住持スベキノ状件ノ如シ。

と述べ、総持寺住職たるの自信の程を示すと共に、峨山法系以外の者の介入を許さぬ決意を示しております。

またその翌々年の一三六四年、実に瑩山禅師が永平寺に袂別して大乗寺二世に補せられてちょうど六十年目でありますが、この年には「総持寺山門住持職ノ事」の置文の中では「遺誡」として、

韶碩門下嗣法ノ次第ヲ守リ、五箇年住持スベシ。若シ此ノ中山門廃スル者有ラバ、法眷相寄テ之ヲ評定スベシ。仍テ後証ノタメ、垂示件ノ如シ。

と誡めております。これらの置文は、総持寺の将来において住職として、また門弟として守るべきことを示されたものであります。

すなわち

一、総持寺の住職たるものは峨山禅師の法嗣であり、かつその任に堪える「器用ノ仁」でなければならないこと。

二、門下の法嗣の順序にしたがって、五院の住持が総持寺に輪住すべきこと。

三、総持寺教団の興廃に関する重要事項については法類が合議して定むべきこと。

等であり、この輪住制度が曹洞宗教団の一大発展の原動力となったのであります。

愛山護法の信念と和合

教団を維持する上にもっとも大切なものは、道元禅師から瑩山禅師、峨山禅師、そして自己へと法灯を嫡に相承してきた児孫たちの愛山護法の信念であり、その信念のもとに培われた本山の護持・発展に対する児孫としての自覚と責任感、そしてお互いの「乳水の如き」和合であ

ります。この、本山護持・発展の源泉となる信心と責任感と和合を生み出すために、輪住制度はまことに適切な制度でありました。

この輪住制度により、本山護持の栄誉と責任が一部の者に専有されることなく、児孫の中の有能な人物に分担されることになり、教団全体がいやがうえにも活況を呈するようになったのであります。しかもこの輪住制度は一つの合議制度をなしており、重要事項はすべて五院の協議によって決定されたのであります。　以上のような総持寺教団の輪住制度は、峨山禅師晩年に完成したものでありますが、禅師の滅後、五哲をはじめ、その法嗣たちによって不動のものとなったのであります。

むすび

仏真寺の現在は総持寺開創の当時と非常によく似た一面があります。前角老師の高弟が各地に分散進出して仏真寺の末寺を建立しておられること、そして相協力して本寺仏真寺の発展興隆をはかっていること、あたかも総持寺の五院を思わせるものがあります。

以上申し述べましたことが、仏真寺の今後の運営発展に何等かの参考となれば望外の幸せであります。

美人首座の法戦式

私の提唱のあとは日中諷経、続いてオーリョーキ・ランチ（行鉢）となった。長版が鳴り、それを聞いて修行者は入堂し、応量器をささげ持って各自の食位につく。魚鼓（版）・下鉢版・鳴鼓と鳴り物は如法に鳴らされ、住持入堂して修行者は応量器を座前に置いて趺座する。聞槌・展鉢の偈にはじまり、折水偈にいたるまで、すべては英語で斉然と唱えられること、僧堂の行鉢と何等かわりない。

応量器（出家者以外は代用品）の取り扱いもなかなか堂に入ったもので、逆にこちらがまごつくものだった。というのは、応量器の中に盛られるものはご飯ではなく、野菜をいためてあえたスパゲティで、生飯（さば）を出すとき一体何を取り出したらよいのかに迷い、こっそり隣を盗み見たり、フォークは箸ほど使い易くないので応量器に箸を使ったり、香汁がジュース、香菜が野菜サラダだったりして、どの椀に受けるべきなのかとまどったり、新米の雲水時代を思い出すような気ぜわしい行鉢だった。

前角老師、佐藤老師、方丈

この食事は欧米人にとってはごく質素な、そして異質なものであろうと思われる。私はすでに古稀を過ぎているので、よく昔のことを言うが、かれこれ三十年以上も前のこと、たしか村松梢風という作家だったが、日本人の枯淡な性格を形成した有力な一因は禅宗料理だといって、禅宗料理の功罪というよりは罪の面のみを強調した記事を新聞に載せていた。

そのとき考えさせられたことだが、禅宗料理というのは、長い間の実践の積み上げによってつくり出されたもので、修行僧にとってきわめて、合理的なものである。坐禅を中心とした、どちらかというと割に静的な生活に、必要最少限の栄養を与え、しかも、特に性欲を刺激しないように工夫されたもので、また食べ物の取り扱いについても、あまり臭くもなく、不潔感も

陽光寺方丈

抱かせず、そして経済的にみても自給自足できるものとなると、中国や日本などの農耕社会においてはどうしても菜食、精進料理となるのじゃないかと思う。

このような食生活によって育成される人間が、枯淡な、植物的な性格を形成するであろうことは当然考えられることであり、これが単に禅寺のみならず、ひろく日本人の生活に浸透して来た事実を考えるとき、村松氏の所説もなるほどとうなずける。これに反して、血のしたたるような肉をジュウジュウ焼いて食べる欧米人が、濃厚でしかも動物的（活動的）なのは、これまた当然過ぎるほど当然なことである。

日頃摂取する食物のいかんは、宗教情操涵養の面にも大きなかかわりがあると思う。二十年前、前角老師が禅センターを開いた頃は、合掌するものがなかったというが、今日では実に美しく心のこもった合掌をもってお互い同士をも拝み合っている。

これについて思い起こすことがある。敗戦後逸早く民族運動をはじめた桑原鶴先生は、食事のときはいつも合掌されていた。或るとき合掌を忘れ、私の合掌したのを見てそれに気付き、「ぼくはナマ道心だから時々わすれるんだよ。これは小沢の真似だからなァ」といわれた。不思議に思った私は、「えっ、小沢君の真似ですって？」とたずねた。というのは、小沢君は桑原

先生の教えを受けている二十代の青年で、なるほど彼は食事のとき合掌していたが、それは、仏教、特に禅に造詣の深い桑原先生の影響とばかり信じ込んでいたからである。すると桑原先生は、「そうなんだよ。小沢の真似なんだ」と前置きして、こんな話をしてくれた。

「小沢と久保田は二人で自炊している。ぼくは『好きなものを食べろ。ただし、食ったものの記録をとっておけ』といって、三年ばかり彼らに食事の記録をとらせたんだがこのごろ彼らの食事は禅宗料理に非常によく似て来たんだ。そうなると不思議だねえ、自然と掌が合わさるようになって来たというんだよ。そこでぼくは考えたんだが、そういう食事をさせたら誰でも合掌できるような気持になるんじゃないか、とね……」

この着想が荒唐無稽なものでないとするならば、今日の食生活の科学的研究にはまだまだ発展の余地があるように思う。

話は横道にそれたが、翌二十八日、法戦式終了後のランチ・レセプションに出された食事もまた精進料理だった。ただ、ご飯のまずいことにおどろいた私は、「これ、カリフォルニア米ですか？」とたずねると、前角老師は、「加州米でもおいしいんですが、これは焚き方を知らないからなんです。弱火で時間をかけて焚くからこうなるんです。ここには電気が来てないので、電気釜も使えないんです」という。これを聞いて、昨日、応量器にスパゲティが盛られた謎が解けたような気がした。

注＝禅のマウンテン・センターにはまだ電気が入ってないが、ソーラー・システムにより、必要最少限の電力は得ている。電気の導入については賛否両論があるという。

八月二十七日、午後五時二十分から本則行茶

がおこなわれた。

茶堂は一番広い建物、禅堂でおこなわれた。恵玉首座には日本人の血が流れているだけあって、丸頭の美人で、日本人とよく似ており、ころもをつけた身のこなしかたもやわらかく、紹介を受けなければ日本の尼僧と見まごうほどである。これにくらべると、父母未生(みしょう)以前から椅子と家畜相手の生活に慣れて来た欧米人の所作は多少ごちごちして見える。とはいうものの、型どおりの進退は心得ており、当役はりっぱにこなせるのであるから感服せざるを得ない。在家身のままで十年、十五年と坐禅を続けているのであるからこそできるのである。

こうした修行者の中での首座であり、第一座たるには少なくとも五年にわたる参禅弁道が必要である。受戒し、得度を経て、所定の公案をパスしなくては首座になることはできない。

禅といえばまず臨済禅の洗礼を受けてきた経過を考えるとき、また、段階的進歩向上に意欲的なアメリカ人を指導するのには、公案を与えることはきわめて効果的なことであろう。ともあれ、所定の公案を通り、法要に精通し、禅僧としての起居容儀を身につけて、文字どおり大衆の第一座たるべき力量を身につけてはじめて首座となり得るのである。したがってその法戦式は正に真剣勝負である。

日本の曹洞宗の法戦式といえば今や資格を得るための通過儀礼に過ぎなくなっており、法問(問答)はサンプルを丸暗記するだけのことである。この頃は問者が下を向いて紙を見ながら法問を呈するぶざまな姿を散見するが、そのうち首座も見台上の文字を追いながら答えるようになりはせぬかと案じられる。

首座法戦式の打ち出しは十一時だったが、それより三十分も前ごろから雷鳴とどろきわたり、一時は雨が心配された。しかし、さいわい

筆者の提唱に聞き入る安居者

にも杞憂に終わり、野外ランチ・レセプションも予定どおりおこなわれたので、至祝不尽の雷鳴と受け取らざるを得なかった。またそれにふさわしく恵玉首座の出来栄えは、まことに素晴らしかった。

雷鳴とどろく中の大播上殿という予想もしなかった演出にはじまった法戦式はまことに予想外のものだった。『般若心経』以外の本則挙唱、法語、法問はすべて英語で唱えられ、法問はまさに挨拶（〝挨〟は積極的に迫ってゆくこと、〝拶〟は切り込んでゆくこと）で三十五人に及び、中にはメキシコの人がスペイン語で問い、それをアルゼンチンの人が英語に訳しての法問もあった。

日本の儀式のように荘厳一点張りではなく、法問がおもしろければ笑ったり、また、安居者を迎えに来たらしい婦人、子供の姿も多く見え、なごやいだ雰囲気のものだった。本則は『従容

録(ろく)』第八十三則「道吾看病」で、法問はそれに因んだものが多かった。一例を挙げると、

問者　Attention Shuso.(直訳すれば〝いきますよ、首座〟。これは挙唱の〝挙す！〟を訳したもの)

昨日、天心(注人名)いわく、「摂心(せっしん)いまだ終わらず」と。真相いかん。

首座　しかり、いまだ終わらず。

問者　摂心、残りいくばくぞ。

首座　摂心終わることなし。正に維摩の病のごとし。

問者　Thank you for your answer.(これは〝尊答を拝謝し奉る〟の訳)

首座　May your life go well.(これは〝珍重・万歳〟の訳)

———

問者　挙す。九旬安居修了せり。足痛み、われ家に帰るのみ。テレビを見、夕べに兎を食することあらば、その料理法いかん(頌の〝成平や天蓋い地擎(ささ)ぐ、運転や烏飛び、兎走る〟に因んだもの)。

首座　われ知らず。

問者　首座の口辺に兎の油あり。それでも知らぬか。

首座　われ汚れ放題。体中に汚れ充満せり。

問者　兎の味いかが。

首座　他と変わらず。

問者　尊答を拝謝し奉る。

首座　万歳(ばんぜい)。

———

問者　挙す。われ、手に薬あり。真偽、試してみるや否や。

首座　不要。

問者　いかに治癒するや。

首座　まず、汝自身を治癒すべし。

問者　尊答を拝謝し奉る。

首座　万歳。

――――――――

問者　挙す。かえりみるに九十日。君、主たる養成人物なり。いかなる功徳ありや。

首座　銘銘、よく自らを看護し、精進に励むことなり。

問者　終身、病める者に、いかなる提言ありや。

首座　病、治るといえども、いまだ病めるところなしといわず。

問者　尊答を拝謝し奉る。

首座　珍重・万歳。

竹篦法語・謝語等は古来慣用のものを英訳したものだった。

このあと、祝語はそれぞれ英語で述べられたが、英語の不得手な私は日本語で祝意を表した。

ここで首座の横顔を紹介すると、

Wendy Lou Egyoku（恵玉）Nakao.

ハワイ出身。父、日系二世。母ポルトガル人。ワシントン大学で一九七〇年（昭和四十五）学士号取得（東アジア史学専攻）。一九七二年修士号取得（司書学）。

一九七五年八月より、シアトルの平野老師のもとにおいて参禅、一九八三年六月、仏真寺前角老師のもとで得度。

法戦式終了後ランチ・レセプションが開かれた。樹間、思い思いの処に立ち、合掌して五観の偈を唱えるさまは実にさわやかな感じだった。メーン・テーブル以外はセルフサービスだったので、全員の食事が終わるまでには時間がかかったが、しかし、九旬安居の別れを惜しみ、迎えの家族とのなごやかな談笑にはかえってさいわいしたようだった。食後、挨拶を求められた私は次のように述べた。

「仕事を休んで九旬安居することは、今日の日本では見られないことです。皆さん方の御精

進に心から敬意を表します。また、今日の法戦式に臨み得たことを心からうれしく思い、恵玉首座の素晴らしい出来栄えを讃え、祝意を表します。

日本はアメリカに対し、禅を輸出した国でありますが、皆様方の参禅弁道の姿を見て、近い将来、日本はアメリカから禅を輸入するようになるのではないかと心配になってまいりました。

この春、日本では『長男の出家』という文芸作品が発表になりました。これは長男が出家して禅寺に入るに至る経緯と、両親の心の動きを描いたすぐれた作品で、権威のある芥川賞受賞作品であります。その中にこんな一節があります。

或る日本人がニューヨークの街で、数人の青年から『禅とは何か？』と問われました。ところがその日本人は禅を知りませんでした。しかし、知らぬといえば日本人として沽券にかかわると思ったのでしょう。わざとブロークンな英語を使いながら、〝Ｔｈｉｓ ｉｓ Ｚｅｎ Ｔｈｉｓ ｉｓ Ｚｅｎ〟といろんな物を指さして言いました。するとその中の一人が、『俺達をからかうのか』とすごんで身構えました。さいわい隣の青年がとめてくれたので事なきを得たのですが、別れて去る彼等のうしろ姿を見たとき、追っかけてゆき、住所を聞いて、あとで手紙で禅の正しい知識を教えてやればよかった、とうしろめたい気持になった、とあります」

私はさらに挨拶を続けて「これはおそらく、作者自身の偽らざる告白なのだろうと思います。著名な作家でもこの程度なのですから、一般の人は禅に対してほとんど関心を持っておりません。中には参禅する人もありますが、精々日曜日参禅会に出席する程度で、九旬安居など思いも寄らぬところであります。皆様方の九旬

安居の蓄積、相続によって、日本に禅を輸出する日の一日も早からんことを期待し、皆様方の一層の御精進をお願いします」と述べた。

次いで黒田師は、前角老師の弟であること、かつてＺＣＬＡで修行しておったとの自己紹介のあと、法戦式の法問が形式ではなく、真に心と心の触れ合いであり、そのまま仏の心に通ずるものであることを強調して称讃したあと、一段と声を張り上げ、「皆さん、どうか前角を助けてやってください。そして世界平和のため精進してください」といって合掌した。小野君は感極まって通訳が出来ない。声が出ない。言葉のわからない安居者たちは何事ならんと不審な面持ちだった。

そのとき黒田師は、“Please help Maezumi, my brother”と絶叫した。兄思いのこの一言に一同胸を打たれ、一瞬シーンとした。そのとき、思わずグラスマン徹玄師が歩み寄り、すわっている前角老師の手を取り、三人抱き合って堅い握手を交わした。ときに黒田師の“Oh My brothr!”の声に万雷の拍手が湧き起こる劇的な一場面となった。

たのしいなごやかなひと時を過ごして、午後二時に山を下ったが、ここで国際禅センターの構想についてふれておこう。前角老師には次の十指にのぼる高弟がおり、それぞれの地に支部センターを設けて活動している。

一、バーナード・グラスマン・徹玄＝ニューヨーク州ヤンカース市、同事山禅真寺住職。

二、デニス・メルツェル・玄法＝メーン州バーハーバー、玉鳳山法真寺副住職。外にイギリスに三ヵ所、オランダ、ポーランドにグループを持ち、安居・摂心を通して指導している。

三、ユーディット・ベイ・澄禅（女医）＝オレゴン州ポートランド、幼児虐待保護センター経営。

四、ジョン・ローリー・大道＝ニューヨーク州マウント・トレンパー、天香山道真寺副住職。
五、ジョン・サンダーソン・徹心＝メキシコ市禅センター・ディレクター。
六、ゲーリー・ヴィック・獅心＝カリフォルニア州サンジエゴ。
七、スーザン・パルマー・妙融＝ワシントンD・C・周辺に禅堂物色中。
八、ピーター・グレゴリー・覚禅＝イリノイ大学教授・クロダインスティチュートのディレクター。
九、フレッド・アンチェッタ・実道＝ZCLAマウンテン・センター、道雲山陽光寺副住職。
十、ピーター・マティソン・無量＝ニューヨーク州ロングアイランド。

いま、アメリカでは各地において禅が強く求められている。それだけに正伝の仏法、禅を正しく伝えることは容易ならぬことであり、その責務を痛感した前角老師はここに国際禅堂の創設を決意したのである。

その必要性を列記すると、

一、各地支部センター（末寺）の成長発展に伴い、宗旨、清規、法式、その他修行並びに運営大綱の統一をはかる根本道場。
二、現在すでに十四ヵ国よりの安居修行者を擁しており、さらに門戸を広く開放し、正伝の仏法を挙揚する国際道場。
三、夏冬二回の九旬安居を中軸とする年間を通じての宗旨と行持の参究道場。
四、出家・在家の指導者養成道場。
五、伝統的な伽藍配置及び如法の僧堂様式等を親しく熟知させる道場。但し、建物の構造仕上げについては、外観は和様とするも、内部は和洋折衷とする。

大体以上に要約される。そのかみ、道元禅師が入宋して正伝の仏法をわが国に将来され、直

接その教えを受けられた義价禅師が入宋し、彼の地の名山古刹を歴訪して五山十刹図を伝来し、永平寺の諸堂を整備するとともに諸清規を制定し、永平三祖となられたが、いま、アメリカには正伝の仏法の種子が蒔かれたときであり、この機にこそ義价禅師の勝躅に学び、アメリカに正伝の仏法の根を張るべく国際禅堂の創設は喫緊不可欠の大事と思われる。

さいわい、道雲山陽光寺の裏山に広大な適地があり、故・秦慧玉禅師により白梅山天真寺と命名されている。ただ、これが実現には莫大な資金が必要であり、日本各界の協力支援が望まれる。

アメリカに行っておどろいたことだが、クルマの先進国アメリカで一番目につくのは、日本車である。また、ロサンゼルスや、特にニューヨークのどまん中で、日本企業の広告ほど目につくものはなく、〝なるほどこれではアメリカもいらだつわけだ〟と経済摩擦の深刻さにいまさら感じ入った次第である。アメリカ側に財的援助を求めることは、木に縁って魚を求めるようなものであり、いまこそ経済大国日本が仏心を輸出する拠点をつくることに努力すべきときであろう。

物の輸出はトラブルのもとだが、仏心の輸出は友好和平の道である。

こうした感懐を抱きロサンゼルスのZCLA仏真寺に戻り、ようやくくつろげるかと思っていたら、二、三十人のロサンゼルス在住のメンバーがやって来た。歓迎の意をこめてのミーティングであろうが、いろいろ真剣な質疑がおこなわれ、時の経過も忘れるほどだった。

或る一婦人は握手ののち名刺を渡してくれたが、その裏面には“To Sato-Roshi,I very much appreciate your visit and your moving talk today. Thank you, Jakunin”と書かれてあっ

た。

『甘露門』の精神実践
NYに禅真寺開くグラスマン徹玄氏

禅では悟道の機縁を大事にするが、それと同じように、異文化の土壌に育った者の入信、禅との出会いは何であったのか。それをさぐることはこのたび課せられた重要な課題の一つであるように思う。

私はかねてからバーナード・グラスマン・徹玄師にそれを尋ねてみたいと考えていた。というのは、哲学博士の学位を持つ数学者である彼は二十五年の弁道であり、前角老師の上足である。今から十年前瑞世に来日されたとき、大本山総持寺で初相見して以来、その後二、三度会っているものの、言葉の通ずる機会を得なかった。

さいわい、道雲山陽光寺で相会うことができ、しかも同道してニューヨークに飛び、彼の主管する禅真寺に拝登する機会を得た。ニューヨークからシカゴに飛ぶ機内で、石川光正君の通訳によって知り得たことを述べてみよう。

彼は一九三九年、ニューヨークに生まれた。今年四十九歳である。彼は両親とは違って宗教心が厚く、神についていろいろ学んだが、どうも飽き足らず、自然に仏教書、特に禅籍に目を通すようになり、手当たり次第に読んだ。その結果、禅にもっとも深い関心を持つようになった。

彼は大学卒業のとき、友人に語った。自分は、

一、禅の僧堂に入って修行する。
二、イスラエルに行って住む（彼はユダヤ系）。
三、ニューヨークで乞食をする。

のうちどれか一つを選ぶであろう、と。

大学を卒業して、共同体生活に興味を持って

いた彼は、二十三歳のときイスラエルに行き、キブツに入ったが、どうも性に合わないことを知って一年で帰り、ガレージに小さな禅堂を造って、ただ独り坐禅にはげんだ。

ニューヨークの大学で宇宙技術を専攻した彼は、ロサンゼルスのダグラス社に入社し、夜はUCLA（ロス大学カリフォルニア分校）において数学を学び、三十一歳のとき学位を得ている。

二十五歳から二十六歳にかけてのころ、ロサンゼルス禅宗寺に赴き指導を受けたが、言葉がよく通じないため、期待した進展は得られなかった。ところがその後間もなく〝ロサンゼルス哲学研究会〟主催による安谷白雲老師講演会で前角老師が通訳されて、はじめて英語で禅の話を聞き、道の開けるのを感じた。確かに海外布教には語学力が決定的な要素である。

会が終わって、前角師と話し合い、数日後に坐禅に訪れ、そのとき（一九六七年＝昭和四十二年）会ったのが黒田武志師だったという。爾来参禅を続けて来た。一九七〇年（昭和四十五年）三十一歳、四月八日に得度した。この年は

彼にとってラッキーな年で、六月には哲学博士の学位を得、またはじめて渡米された苧坂光龍老師について無字を通った。

その頃は見性にこだわっており、他人にも勧めていたが、摂心を重ねるにつれ、そのこだわりも消え、数年後、世界中が飢えていることに気付き、『甘露門』によくなじんだというのであった。『甘露門』といえば施食会のときに読む、先亡の精霊に施すお経ぐらいにしか思っていなかった私は、〝さすがは！〟とその卓見におどろいた。

一九七〇年、三十九歳のとき、ニューヨークでラジオの宗教番組のスポンサー、レックスさんに頼まれて、レックスさんとの対談を放送した。彼の人柄に惚れ込んだレックスさんは、彼に無断で、一週後の週末に坐禅の会を催すと放送した。これが機縁で、彼を中心とする坐禅グループがニューヨークに誕生した。彼はその頃、ロサンゼルスでも中心的役割を果たしていたが後進に道をゆずり、このラジオ放送を機に生まれ故郷のニューヨークに帰ることになった。前角老師は、「今後二年間はあまり訪問しない。ニューヨークの風土に即した自由な活動をしてほしい」と要請したという。

いまアメリカ中で家のない人は二百万人もおり、子供の平均年齢は六歳であるという。そしてグラスマン徹玄師の主管する禅真寺の所在地ヤンカース市には、貧しい、家のない人が非常に多く、それらの人びとはシェルター（体育館のようなところ）に泊まっており、子供の通学には二時間も要するような状態だが、これが解決策は何等講じられていない。そこで禅真寺では、設計工務の会社をつくり、住民を指導して住民自らの手で家を造らせている。こうして家を支えるだけでなく、職業訓練をし、子供の保育を受け持ち、また、月に一度施食をおこなっ

ており、二百五十人分ぐらいの食事を家のない人びとに施すなど、住民に自活の道を講じている。こうした活動は市当局やキリスト教の人たちの協力するところとなり、アメリカでもモデルケースとして広く注目されているとのことである。

これは『甘露門』を主軸とした慈悲行で、禅真寺のメンバーは『甘露門』「五如来宝号招請陀羅尼」にもとづいて五つのグループに分けられ、それぞれ活躍している。

禅真寺のメンバーは百五十人、居住者は二十五人で、これらの活動のための収入源として徹玄師は六年前、ベーカリーを設立した。これは徹玄師のヘレン夫人が主任で年間九十万ドルの売り上げがある。来年はアイスクリームもつくり、百万ドルを突破したいと意気込んでいる。

年一回、十日間のセミナーをおこなう。今年は「発菩提心」をテーマとして六十人が参加したという。ほかに一週間の勉強会、年二回一週間摂心、年四回の週末摂心、月一回（第一土曜日）は一日坐るというふうに、本来の行持もきちんと行じられている。

キリスト教会を禅堂に改造

「徳は孤ならず、必ず隣あり」というが、禅真寺の隣にキリスト教会があり、その教会の古い礼拝堂を開放するから禅堂に使ってはという申し入れがあり、近く内部改造して禅堂に生まれかわることであろう。キリスト像も仏像もなくていいじゃないかといっているが、東西霊性交流の殿堂として注目を集めると思われる。

夜はここでもミーティングが開かれたが、ここで善光寺海外留学僧派遣育英会の第四次派遣の越石君に、理事長の黒田方丈から辞令の交付がおこなわれた。越石君もニューヨークの生活にだいぶ慣れた様子だった。

垣間見る先駆者の心
すがすがしい道真寺

現在、全米の仏教グループは四、五百とか、またはそれ以上ともいわれているが、トレンパーの道真寺はもっとも整備された禅道場である。

ニューヨークの中心部からハドソン河に沿ってキングストンまで百二十キロばかり北上するのだが、このときクルマの中で、五十数年前、旧制中学で習った英語のリーダーの一節がよみがえり、思わず口ずさんだ。ワシントン・アービングの『スケッチブック』の一節じゃなかったかと思う。"Whoever has made a voyage up the Hudson must remember the Casskle moutain

そのハドソンに沿って遡行しているのだと思うと、なんだか夢の国に出かけるような気分になった。

キングストンから西へ三十キロも走ると、トレンパー山が見えて来て、山を見ながらクルマを飛ばしていると、道真寺に到着した。ニューヨークから二時間の距離である。

先述と同様に、六十年前に建てられたキリスト教修道院が今から八年前、道真寺の入手するところとなった。百五十人は起居できるというから、なかなかりっぱな禅道場である。境内地は十四万坪というから、日本の本山クラスも顔負けの広大さである。ここの主管はジョン・ローリー大道師。昨年瑞世(ずいせ)に来日されたとき会っており、またここは私の徒弟采川道昭が修行していたところなので、はじめての拝登ではあるが、親近感があった。

この寺で修行僧として黒衣をまとって修行しているのは数人だが、在家のままの修行者が二十数人おり、グレーのユニホームを着けている。

ここのメンバーになるには、まず旦過寮で一日坐ることが課せられており、一年間は〝生徒〟と呼ばれ、この間にお経を習ったり、必要な所作を身につけたりする。そして一年後、本人の希望により受戒して安名をいただく。そしてさらに一年以上沙弥の位にあって、そののちに得度ということになる。

修行の在り方については、ロサンゼルスと同様、夏冬九旬の安居、三ヵ月ずつ二回の解制期間がある。毎月摂心があり、修行者の機根に応じて公案が与えられ、また只管打坐が指導されていることはこれまたロサンゼルスの場合と同じだが、ここでは特に禅アートを重視し、坐禅の研究会の外に、茶、生け花、墨絵、空手などに関心のある人びとに研修の機会を与え、坐禅を指導している。こうして集まる人たちの寄付金や会費などがこの寺の経済を支えているという。またここでは雑誌『マウンティン・レコード』その他の出版物を通して、布教活動を展開している。残念ながらここには一時間少々しか足をとどめることができず、心残りだったが、一同の門送を受けて去るときは、最後の日程をこなし得た安堵感もあってか、トレンパーの山の空気のように澄んだすがすがしい気分だった。

"Whoever has made a voyage up the Hudson must remember the mt. Trenper Doshinji"

誰か第二のワシントン・アービングが出て、こうした書き出しで道真寺物語を書かないだろうか。いや、きっと誰かが書くことであろう。なぜなら、ロサンゼルス仏真寺を源とした禅の一河は、いまこの地を経て、ヨーロッパにまで及ぶ大河の流れを形成しようとしているからである。五十年後、この地を訪れる人は、今日の私と同じように口ずさむであろう。

思えば前角老師の力量と功績はまことに大なるものである。しかし、世の通弊として、予言者世にいれられず、先覚者報われずで、その道は想像以上にけわしい。

ＺＣＬＡ仏真寺の元旦は、寺から十キロほどの距離にある日系人墓地エバーグリーンに出かけ、在留邦人物故者慰霊塔に額づき、また、アメリカに対し日系人の比類なき忠誠心を示し、対日感情を大きく変えさせたイタリア戦線における二世部隊の英霊に供養し、併せてアメリカに禅をもたらした先駆者の一人、千崎如幻老師の墓前に諷経することからはじまる。この墓参はＺＣＬＡの創立と同時にはじめられ、毎年欠かさずおこなわれてきたという。先駆者前角師の心を垣間見ることができるような気がする。

前角老師の今後一層の御精進と法身堅固（ほっしんけんご）、国際禅堂創設の大願成就を祈念して、ペンを置く。

＝おわり＝

道真寺本堂にて心経読誦